

[報告] 女学生のみた関東大震災

(第 29 回歴史地震研究会公開講演会要旨)

フェリス女学院大学国際交流学部* 大西比呂志

§ 1. はじめに

311 震災のほんの数ヵ月前、『関東大震災 女学生の記録』(フェリス女学院 150 年史資料集第 1 巻, 2010 年 12 月)という資料集を刊行しました。これは横浜の山手にあった本学院の国語教師が、関東大震災の体験を地震後まもなく在校生の 151 名に書かせた作文集で、原本は「大正十二年九月一日 大震災火災遭難実記」として今日に伝えられています。学校が作成したいわゆる「震災作文集」には小学生のものがいくつか知られていますが、中等教育を受けた多感な 16 才から 18 才の女学生の記録は、それらに比べて情報量・精度において大変貴重と思われる。90 年前の大災害で生き残ることができた彼女たちの体験からいくつか紹介します(本書の問合せは学院資料室:045-662-4411)。

§ 2. 女学生たちの震災体験

関東大震災では横浜の死者・行方不明者 2 万 6 千人余り、被災家屋 3 万 5000 戸となっています。この数字は、集中度からいえば東京以上で、港湾部、関内、関外、山手という市中枢部が壊滅しました。生徒たちはまだ夏休み中だったので、一部が旅行や避暑、帰省先にいたことを除けば、ほとんどは自宅があるこの壊滅した地域のまただ中で地震を体験したわけです。

当時人口 44 万人の大都市横浜には様々な地区(ビジネス街、工場地帯、住宅地、繁華街など)、地形(海岸部、運河沿い、谷戸、高台など)があり、体験は地域によって様々です。

海岸通りの弁天橋のたもとにある女子青年会館の三階でタイプの稽古をしていた生徒は「忽ちぐらぐらと建物は揺れ出し、私はよろよろとよろけた途端にはねとばされる様に左手の方に倒れてしまひました。夢中になって大波の様に揺れて居る床にしがみつきますと、こんどはみしと云ふ音と共に床は私共をのせたまゝ右の方に斜になり、それと同時に柱が倒れ屋根が落ちて来た様でした」と建物倒壊の瞬間を書いています。「東京は大火災、横浜は大震災」(今井清一)という特徴があらわれた様子です。

火事が広がりつつあった川沿いの蓬莱町の生徒は、「無中で走ったが、権三橋が落ちて居るので鶴の橋へ行こうとして、途中煙は私共を蔽った。私共は先を見ることも出来なかった。私共は無中で川の中に飛びこんだ。...水の中は熱い、そしてきたない。また頭は焼けそうである。いくら切れをかぶって水をかけても息の出来ない程くるしい。上では凄じい爆発の音、風の唸り、川へは溺れた人の死体が流れて来る。」と火災と煙に巻かれ行き場を失って川に飛び込んだ恐怖の体験をしています。谷戸と高台がある西戸部へ避難した生徒は「ぜいぜいひながら又かけ出しました。小さい子供をおぶった人が襦袢一枚だけでにげてきます。だんだんにげてくる人が「火が近づきましたよ。老松小学校も焼けて、十全病院にも今火がつきそうです」などといわれて、私達は思ひきって野沢の森へにげる支度をしました」と高所に向かって群集が押し寄せ、そこに火の手が迫っている様子を記しています。鎌倉にいた生徒は「海嘯ッと云ふ人々の叫ぶ声と共に恐い勢ひで海嘯はおし寄せて来た。私の家は浜の近くにあったので、ずい分驚いてしまった。私は母達に続いてつぶれた家の上を渡って逃げ出した時、後には恐い泥の波が私達を追ひかけて来た」と、今回の震災を彷彿させる津波の証言をしています。

そしてよく知られた「朝鮮人襲来」という悪質な流言について、市内の岡野小学校方面に避難していた生徒は「どこからともなくおそろしい噂が伝って来た。朝鮮人襲来。一時に火の起きたのは、地震の結果ばかりではなく鮮人が火を放ったのであると知らせが伝って来た。こゝに於て町内の警備の人は、俄に殺気立ち日本刀を持ったり短刀、木剣を手にして、俄に竹槍を造って持つものもあった」と書いています。何人もの生徒が同様の記述をしています。この「噂」とこうした日本人の様子以外に「襲来」を実際に見た記述が皆無であることが注目されます。

§ 3. 現代への記録

それぞれの体験とともに興味深いのは周囲の状況の記録です。ある生徒は「私達が庭へ出たのを見たお隣りのおばさんは、「此方へいらっしやい、この木の

* 〒245-8650 横浜市泉区緑園 4-5-3
電子メール: oonishi@ferris.ac.jp

下は安全ですから」と声をかけられ、またある生徒は余震が続く中「私達はお隣の方々とかたまりになって庭の太い木へしがみついて、震動の治るまで待った」。本牧の家で押しつぶされた生徒は「私と私を助けて下さった近所の方は一生懸命に「おばあさん」と声を限りに呼びました」とあります。151 人の証言のほとんどに出てくるこの「お隣」や「近所」は、彼女たちが生き残ることが出来た要因の 1 つを示しているようで

す。共同体を含む社会のあり方機能の仕方は、地震被害の程度に関係するでしょう。90 年前の震災のなかで被害の低減化に有効に作動したものをさぐることは、現代にとっても大いに意味あることと思います。

主な著書:『横浜市政史の研究』有隣堂(2004),『横浜をめぐる7つの物語』フェリスブックス 12(2007)